

對談集 司馬遼太郎

日本人の顔



朝日文庫

対談集 日本人の顔

朝日文庫

昭和59年5月20日 第1刷発行

定価 360 円

著 者 司馬遼太郎

発行者 初山有恒

印刷製本 凸版印刷株式会社

発行所 朝日新聞社

〒104 東京都中央区築地5-3-2

電話 03(545)0131 (代表)

編集=図書編集室 販売=出版販売部

振替 東京0-1730

© RYOTARO SHIBA 1984 Printed in Japan

ISBN4-02-260273-2

対談集 日本人の顔

司馬 遼 太 郎

目次

世界の中の日本人 〈江崎玲於奈〉 7

イラン革命の文明的背景 〈黒田寿郎〉 51

変わる中国 〈田所竹彦〉 77

古代の朝鮮と日本 〈李進熙〉 91

薩摩焼と鉄とアジア 〈沈寿官〉 113

日本人の顔 〈梅棹忠夫〉 153

日本の田舎と都会 〈山崎正和〉 179

日本人と土地 〈都留重人〉 207

あとがき 235

対談集 日本人の顔

江崎玲於奈／司馬遼太郎

世界の中の日本人

江崎玲於奈

一九二五年生まれ。東大理学部卒業。トンネル・ダイオードの発明により、七三年ノーベル物理学賞受賞。米IBM主任研究員。

管理社会と創造性

司馬 この間、外モンゴルに行ってきたんですよ。

江崎 おもしろかったですよ。

司馬 おもしろかったです。広さはヨーロッパの半分ぐらいあって、人口は百万ぐらいじゃない。でも、ちゃんと理論物理学者が何人かいます、すそ野もわずかながらあるようです。地球は広くなったというか、文明の密度が濃くなった感じですね。政治の世界に秀才が行きたがらずに、つまり官吏になりたがらずに学問をしたがるんです。特に理科系の学問をしたがるんです。ソ連との関係のむずかしいところを背負うというのはいやだといった心理が働いているんじゃないでしょうか。

江崎 政治よりむしろサイエンスにエスケープしようというふうなことです。

司馬 よくいえばエスケープですね。どうしようもない運命らしい、ソ連のほうも。

江崎 ソ連自身もサイエンスの学生がものすごくおるわけですね。ソ連とモンゴルとだいたい状況は違っているんだけど、ソ連でもやはり逃げようといえますか……。

司馬 やっぱソ連の場合もそのようですね。法科あたりへ行くよりも、そうでない才能を持てれば別のほうに進みたいという気分があるんじゃないでしょうか。

江崎 法科あたりにはエコノミストもずいぶんたくさん行きますね。

司馬 計画経済ですからね。

江崎 プランニングを全部やらなくちゃいけない。日本もビュロクラシイ（官僚主義）と思いますけれども、ソ連はまだそれに輪をかけて官僚主義的な国ですね。

司馬 そのエコノミストたちも一種の技術者ですね。

江崎 サイエンスの分野なんかでも、ああいう社会はある意味においてはほんとうに創造的なものが出てくる余地が少ないんです。サイエンティストはカネはもちろんのこと、総体的に優遇され数でこなすわけですからいい仕事をたくさんやってるわけですけれども、全般的なレベルはアメリカやヨーロッパに劣るように思われますね。

司馬 人間の意識を管理するとか監視するような体制というのは、そういう面では……。

江崎 やっぱりわれわれ人間は意識をコントロールされたら、本能的にたまらないです。

論理のいらぬ社会

司馬 そういう意味では日本にも意識の相互監視というのはありませんか。つまり、日本の社会というのはおにぎりみたいなところがありますでしょう。江崎さんのよくお使いになる一様性みたいところが。おにぎりのごはんのくつついた形で、人間の組織みたいなもの、

あるいは世間とか、各分野ができあがっていて、パンがやってくると困るとか、チーズがやってくるとそれをはねのけるとか、そういうようなところがありますでしょう。日本人は非常に狭い社会で暮らしてきたから、ソ連のような体制としてじゃないんだけれども……。

江崎 日本人はいままで二千年来、司馬さんのおっしゃるように抑圧されたソサエティーというもので住んでおりましたからね。

そこで司馬先生にうかがいたいんですけども、仏教が入ってきたり、中国との交易で漢字に代表される中国文化が入ってきたりしたときには、おそらく日本にはかなりいろんな問題があったと思う。そういうときに日本人はどういう態度を取ったか、日本の社会はどのような受けとめ方をしたか。それ以後は比較的平穏で、蒙古の来襲とか、豊臣秀吉が朝鮮に攻めていったとかいうことはありましたが、あれはごく皮相的なもので、ほとんど国際交流とはいえないようなものですね。そのへん、徳川家康というのはうまいことやってるわけです。閉鎖社会の内部でそういう問題をすべて解決してしまった。政策として鎖国ができるなら、今の日本でもそれをやったらいいわけです。

司馬 いつでしたか、東京でやったローマクラブで、徳川時代に戻るほうがいいという意味の提案をイタリアの人がしたんです。

江崎 戻れたら戻ったほうがいいけれども、戻れないところに現在の問題があるんじゃないですか。

司馬 徳川時代というのはおもしろい時代です。東海道を大八車に乗って行くわけでもなく、かごで行くわけでしょう。かごというのは車にくらべて不自由なものなのに、あの乗りものを変えようとしない。変えないことによって、つまり進歩させないことによって世の中がくずれないんだ。鉄砲が戦国末期に日本に伝わった。ところが徳川時代は伝来した鉄砲の秘伝を守って、例外はありますけれども、基本的な改良は考えずに、鉄砲に象眼をしたり、装飾をしたりする。それが徳川工芸の基本ですね。

江崎 ところが、明治になると事情が変わります。西洋文明を入れざるをえない時代になったわけですね。外国からノウハウを入れてくるのは日本の会社だけじゃなしに、あらゆるところで入れてきたのです。私も思うんですけれども、西洋文明なかんづくサイエンスに対する日本人のとらえ方は、論理としてとらえたんじゃないと思うんです。

司馬 論理は必要ありませんね、この社会では。論理があればすぎすしますしね。

江崎 そうすると、ことばも論理的に表現する必要があるわけです。しかし、われわれのようにサイエンス、特に物理をやっている人間には、はなはだ不自由なことになる。ロジャー・ペーコン、フランシス・ペーコンというような人が、日本には全然おらず、科学思想の土壌がなかったことが、この原因ではないでしょうか。はじめは哲学、それから科学思想として生まれたものが技術に結びついたのが十九世紀のヨーロッパでしょう。そういうふうなプロセスを全然輸入しないで、ちょうど会社がアメリカの大会社からノウハウだけをもって

くるように、できあがった結果だけを持ってきたわけですよ。

科学というものは、閉ざされたものではなく、自分たちでどんどん開発していくものです。物理学とか化学とかにちゃんと分かれておれば、物理学なら物理学のある分野を進めるのは学問というものが具合がいいんだけど、実際はもつとダイナミックなものでしょ。学問全体がしょっちゅう変化しているのです。そのプロセスをどうさばいて行くかが、日本人にはできないわけですよ。

日本人というのは、別の面から申しますと、勤勉でそれほどばかでもないし、白人の平均のIQが一〇〇とすると、日本人は一〇五であるとか……。それはうそか本当か知らないけれども、ともかく平均的日本人というのはわりあい勉強好きでしょうし、私の講演会にもたくさん聞きにこられる(笑)。何かを学ぼうとする精神は非常にまじめであるわけで、何か問題を与えられたときにそれを解決する能力を身につけるということで、西洋に対抗しようとしたんじゃないかと思えます。明治以来のインフエリオリティコンプレックスで、みんな何とかして生きなくちゃいけないということ、明治のはじめに、まず軍艦をつくれといわれたら、みごとに軍艦をつくるという具合に与えられた宿題ばかりやってきたわけです。それはある程度成功したと、私は思うんですけれども。

東京空港に帰ってくるときに、アメリカから帰ってきてても、ヨーロッパから帰ってきてても、どこから帰ってきてても、これほどうまく西洋をまねた文化がコッ然と現れるというのは、不

思議な感じですよ。ヨーロッパの場合は隣国同士、おたがいに連続性がありますが、アジアでは不連続的に突如として大東京が現れる……。

空海以後

司馬 結局、アメリカなりヨーロッパなりから帰ってこられて、東京の空港で、ホッとするのは、普遍性がそこにあるからでしょう。日本人は空港の姿はこうあるべきとか、ルールはこうあるべきだという普遍性に非常にあこがれている。自分が特殊であるということにたいへんコンプレックスを抱くわけです。

さきほどの科学思想のベーコンの問題ですけれども、ベーコンから技術ができあがってきて、工業ができあがってくる。日本の場合には、江戸時代の中期より下ったところに三浦梅園という大科学者、哲学者が、九州の国東半島にポツンといたわけですけれども、そういう人間は彼だけで絶えるのです。そこから一つの物事も発展していかない。梅園の場合は点としても連続しません。

空海の場合もそうです。空海も、真言密教の世界とかインド的な宇宙観というのは科学だと思っていて、彼は多分に科学者のつもりでいた。ただ、今の科学と違って、自分が入り込むことができる科学、つまり宇宙構造の中に自分が入り込んで、宇宙そのものになれる。

そのときに即身成仏するんだと、本当に理論物理学者のように真言密教をとらえていたと思うのですよ。空海というのは非常に論理的な人です。なぜかというところ、インドは非常に論理的な世界なんです。が、たまたま密教はインドでは新しく起こった仏教であつたために結晶せず、まだ流動体の形だつたんです。中国は抽象的なことを好まないものですから、中国では大きな抽象性としてそれが完成しなかつた。それを空海がいきなり日本に持つて帰つて非常に論理化した。

江崎 彼はどこで勉強したんですか。

司馬 長安に二年たらずおつただけなんですけれども、それだけでたいへんな論理の組み立てをしてしまつたわけです。中国でなお流動体であつたものを、彼は組み立てて結晶体としたような感じがあるんです。空海がそれをひとりですましてしまつたために、空海のと千二百年ほど弟子たちは何もしなかつた。発展も何もしない。結晶ですからしょうがない。それを覚え込んで、まねをして、継承して、ごはんを食べていくだけで千何年も続いたというのも、空海をこわすという勇氣がなかつたということですね。

江崎 私は空海のことばはぜんぜん知りませんけれども、空海以後の発展性がぜんぜんなかつたということは、こういうことではないですか。司馬さんは結晶という表現をお使いになりましたけれども、具体的に申しますと、サイエンスというものは本質的に無限に発展するということのような感じがします。物理学というのは自然の法則を研究するということだけでも、